
なのはStS再構成SS 『COMBINATION ATTACK!!』

枇紗簾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なのはS t S再構成S S『COMBINATION ATTACK
K! !』

【Nコード】

N 9 4 2 0 X

【作者名】

枇紗簾

【あらすじ】

なのはS t S再構成物。リンクとティオールというオリジナルキャラクターを加えて物語が進行していきます。リンクとスバルの恋愛を綴ったりもなきしにもあらず…。

物語が進行していく中でリンクとスバルの恋愛模様を番外編でお届けします。お惚気話注意。

主がめんどくさがりやで暢気なので、ノロノロと続けていく形になります。どうか生暖かい目線で見守ってください。

それでは、リンクとスバルが最高のコンビネーションを目指す物語、
始まります。

序章「出会い、そして模擬戦」（前書き）

【更新】細かく更新して出していたのですが、一個に纏めた方が良いかнаと思ひ纏めました。

始めまして、おはようございます、こんにちば、こんばんわ、お久しぶりです…思いつく挨拶を並べてみる。

枇紗簾と申します。『びしやす』と読んで下さい。

初作品ならびに本編半分くらいまでしか見てないぜ！の状態で作られ始めたこのSS。もうぐだぐだなんてもんじゃありません。所々知識が間違っていたりセカンドモードじゃないと使えない魔法を普通に使っていたり。原作ブレイクにもほどがあるっ！！

ほんとにぐだぐだです。原作に心入れてる人は切れる可能性あります（え

そこはそうじゃないだろ！と突っ込みがありましたらコメントの方に。

せめてボケ返せる位の突っ込みで宜しくお願い致します（え誤字、脱字発見したらお知らせください。多分1週間以内には直します。

長らく愚痴を書きました。本編をお楽しみ下さい。

序章「出会い、そして模擬戦」

ティアナ「ここが機動六課…」

ティアナが大きな建物のエントランスで呟きをもらした。

スバル「ほら、早く行かないと最初の集合に間に合わないよっ」

ティアナ「遅刻寸前まで家の布団から出てこなかったのあんたじゃない！私は悪くないわ！」

ティアナの軽い拳骨がスバルの後頭部に当てられる。

スバル「いたっ、ティア、ひどいよぉ…」

ティアナ「泣いてる暇があるなら走りなさい！ホントに遅刻しちゃうわよ！」

スバル「ふえっ、ティア、置いてかないでよぉっ！」

ティアナとスバルはお互いを罵倒しながら、それでも顔には笑顔を浮かべ、笑いながら走っていく。

それをある一室でカメラを使い観察している者がいた。

はやて「ほんまにだいじょうぶやろなあ・・・」

機動六課設立者兼部隊長のはやては心配気に呟いた。

ここが機動六課…ね…

そして、新しい者が機動六課の扉を叩く。

なのはSttS再構成SS「COMBINATION ATTACK
！！」序章『出会い、そして模擬戦』

はやて「選り抜かれた者たち、ようこそ機動六課へ、私は部隊長の八神はやてや、よろしくたのむな」

なのは「始めまして、高町なのはです。主に皆の身の回りの世話をしてくるので何か困ったことがあったら遠慮なく言ってね、よろしくおねがいします、で、フェイトちゃんは？」

はやて「いまあと一人迎えに行ってる、じきに来るやろ」

なのは「そっか、じゃあ一足先に皆に自己紹介してもらおうかな。出身とランクくらいでいいか」

ティアナ「では私から。私はティアナ・ランスター。ミッドチルダ西部エルセア出身で、魔術ランクは陸戦C。銃撃を主体にしています。これから一年間、よろしくおねがいします」

スバル「私はスバル」ナカジマ。ミッドチルダ西部エルセア出身の魔術ランクはティアナと同じく陸戦Cです。近接戦闘を主体に戦っています、よろしくおねがいします」

はやて「ん・・・スバル」ナカジマといえば・・・」

なのは「管理局では『二色の閃光』って通り名で有名じゃない？相手はなんて名前だったっけ・・・」

スバル「リンク」ザ「フォンティナですね、彼は私の昔からの友人です」

そういつた瞬間に、はやてとなのはは動きを止める。

ティアナ「・・・どうしました？」

はやて「・・・いやあ」

なのは「偶然ってほんとにあるんだなって」

ティアナとスバルは首をかしげる、そんな時だった。

フェイト「ただいま」。連れてきたよ」

なのは「おかえり」。後ろにいる男の子がそうかな？」

スバルとティアナは男の子なんだ・・・と視線を動かす。

スバル・ティアナ「・・・え？」

リンク「・・・本日付で機動六課に配属されました、リンク」ザ

フォンティナです、よろしくおねがいしま．．．ってえ？スバル？
ティアナ？」

スバル達がよく見知った顔が、そこにあった。

はやて「これはまあ．．．何たる偶然」

なのは「『二色の閃光』の二人がここで揃うとは予想外だね．．．
リンク「『二色の閃光』．．．それって僕達のことですか？」

はやて「そうや、君たち、中々に管理局の中では有名もんやで？」
スバル・リンク「．．．知らなかった．．．」

はやて「なんや、自分達がそこまで強くないとおもつとるんか、二人でのコンビネーション攻撃は技術ランク的にAAオーバーやで？」
ティアナ「ええっ！凄いいじゃない、スバル！」

スバル「ええ．．．私はリンの言うこと聴いてるだけだよ．．．？」
リンク「気安くあだ名で呼ぶな．．．俺は場に合わせて攻撃プランを練ってるだけだ」

なのは「．．．あんな魔力弾が大量に飛び交う中で攻撃プランを練ってるの？」

リンク「回避だけには自信があるんで。自分は作戦を組み立ててスバルに実行してもらい、それに自分のタイミングを合わせているだけです」

なのは「タイミングって．．．「ああっ！！」ってどうしたの？は
やてちゃん！？」

はやて「もしやあんた．．．『グッドタイミング』の名で知られる．
．．あのリンクかあっ！？」

リンク「ええ．．．なんかそう呼ばれてるみたいですね、ていうか
部隊長、僕を引き抜く際にそういう情報はなかったんですか？」

はやて「書類見ただけでビビッときたんでなあ．．．忘れてたわ」
リンク「はあ．．．じゃあ改めて自己紹介させていただきますね。

僕の名前はリンク「ザ」フォンティナ。仲間達からはリンの名称で呼ばれています。執務官学校「所属」だった者で、ミッドチルダ出身・・・詳しい場所は知りませんが・・・魔術ランクはB+、スバルと同じ近代ベルカ近接式です。よろしくおねがいします。」

なのは「・・・執務官学校所属だった者って？」

リンク「はやて部隊長に引き抜かれたときに、学校には一時退学兼留学しているという風に伝えてあるんです」

フェイト「・・・なぜはやて部隊長の引き抜きに応じたの？」

リンク「貴方の傍で仕事を見たいからです、フェイト執務官」

フェイト「・・・えっ？私？」

なのは「ああ・・・フェイトちゃんは執務官だからね・・・なるほど、いろいろと学びに来たんだね。ティアナも執務官志望だったっけ？」

ティアナ「ええ・・・そうですけど」

リンク「ティアナほど自分は技術がないんで、いろいろと教えてください」

ティアナ「・・・さりげなく嘘つくんじゃないわよ、どう考えてもあんたのほう指揮技術は上じゃない」

リンク「団体は指揮したことがなくてね・・・僕はティアナの指示通りに動くからさ」

ティアナ「・・・私がリーダーなの？」

はやて「そうや、この機動六課フォワード陣は、あんたがまとめるんやで」

スバル・リンク「ティアナ、よろしく（な）！」

ティアナ「・・・ふう、わかりました、これからよろしく頼むわよ、みんな」

リンク「・・・ところで、あそこで遊んでる子供3人は？」

フェイト「ああ・・・あれも貴方たちの仲間よ、おい、エリオー、キャロー、ティオー」

???「はい!」

子供3人がフェイトの声に反応しこっちに付けてくる。

リンク「・・・この子達は?」

フェイト「うーん・・・私の家族の3人かな、こっちの男の子がエリオ。この女の子がキャロ。最後の女の子がティオールっていうんだ」

エリオ「あなた方が今日から私たちのお兄ちゃん、お姉ちゃんになるのですか?」

リンク、スバルティアナともの噴出す。

スバル「どどど、どういうことですか!? フェイト執務官!」

はやて「これから同じ部隊で戦うんや、家族も同然やる? べつにいいやないか、なあ、なのはちゃん?」

なのは「リンクくんは弟と妹が出来て満更でもない顔してるけどね」

ティアナ「・・・リンクってロリコンだったのか・・・」

リンク「違うわっ!・・・っと、君達が今日から家族になる子たちなんだね。よろしくおねがいます・・・かな?」

エリオ「・・・お兄ちゃんって呼んでも良いのですか?」

リンク「おお、呼べ呼べ、好きにしたら良い、だってお兄ちゃんになるんだから。ね? フェイト執務官?」

フェイト「・・・案外リンクが面倒見てくれそうで助かるわ。その子達、よろしくね」

リンク「ええ、任せてくださいな」

スバル「・・・リンクの適応力が凄い」

ティアナ「私たちじゃあんなこと出来ないよ・・・」

軽く凹む二人であった。

リンク「・・・ここは?」

なのは「訓練施設だよ?」

リンク「・・・どうみても全員が動き回れるスペースではないのですが」

なのは「ふふっ、みててね」

そういうとなのはは手元にあるコンソールを叩いた、その瞬間。

スバル「・・・おおっ!？」

ティアナ「なにっ・・・これ・・・っ!？」

リンク「一瞬にしてビル群のステージに・・・!？」

なのは「ここは管理局の最先端技術を使って作った訓練施設だよ。

実態があるから触れるし、訓練にはもってこいだね」

フォワード陣は驚きで声が出せない。さらにそこにとどめが入った。

なのは「皆には今からここで、私一人を相手に模擬戦してもらいます」

顎が外れるぐらいにあんぐりするフォワード陣。

なんせ管理局のエース・オブ・エースと呼ばれる女性だ、勝てるわけがない。

なのは「今日は皆の腕を見るだけだから、攻撃は特にしないよ、皆で協力して私に一発入れたら今日は終わり。簡単でしょ？」

彼女が鉄壁のプロテクションを持っているのをフォワード陣は事前から知っている。全員でかかっても勝てるかどうか・・・

リンク「・・・分かりました。やりましょう」

ティアナ「リンク!？やる気なの!？」

リンク「逃げても仕方ないだろ、やれることやって情報取ってもらって最適な訓練をしてもらうのが最善だと思うけど？」

なのは「その通り、これで大体の皆の長所とか短所とか一気に掴ませて貰うから、全力全開で私に突っ込んできてっ!!」

「「「「「はいっ!!」「「「「「」

全員分の声が響く。そこでリンクは気づく。

リンク「そっぴやエリオ達の紹介を聞いてないな。仲間の力は知っておいたほうが良い、頼むよ」

エリオ「・・・あっはい!僕の名前はエリオ・モンディアルです。

陸戦Bランクの近代ベルカ近接式です」

キャロ「ええと・・・私の名前はキャロ・ル・ルシエです。陸戦C＋ランクの竜召還士です、この子が私の友達、フリードです」

フリード「きゅくるー」

竜召還士が、珍しいなと思いながらリンクは最後の少女に目を向ける。

ティオール「私の名前はティオール＝ランドルク！空戦B－ランクの近代ミッドチルダ式だよ！気軽にティオって呼んでねっ。りんにい！」

リンク「りんにいっ・・・！？まあいいか、これからよろしく頼むよ」

「・・・はいっ！！」「」

なのは「まだみんな自分専用のデバイス持っていないよね？スバルのリボルバーナックルはともかく、リンクのは支給されたデバイス？」

リンク「ええ、学校から支給された奴です。メンテナンスでも？」

なのは「いいえ、今回の結果から皆に合ったインテリジェントデバイスを作ろうと思うの。これから皆は前線で戦うのに一人じゃ辛いから、人工知能をもったデバイスで補おうと思って」

全員の顔が晴れる。

スバル「皆のを作ってもらえるんですかっ！？」

なのは「ええ、前線で戦ってもらえる貴方たちになら、開発費のちよつとやそつとは動かせるよ。皆も、どんなデバイスにしようか考えておいてね」

「・・・はいっ！！」「」

なのは「じゃあ模擬戦を始めようか。みんなバリアジャケットをまとって！」

それを合図に、皆の服装が変わり、それぞれのストレージデバイスが構築される。

リンク「スバルと俺はお揃いなんだよね」

スバル「おそろっ・・・！？こんな時に何言うのさリンクっ！？」

なぜかスバルは顔を赤くしている。なんでだろうか？

ティアナ「昔からリンクの鈍感な感じは凄いわね・・・」

リンク「ん、何か言ったか？」

ティアナ「貴方が馬鹿と言ったのよ」

リンク「おい」

なのは「ほらほらみんなっつ、配置について！」

ひとまず僕らは所定の位置につく。

エリオは槍、キャラは手袋、ティオは杖らしい。

リンク「槍か・・・男のロマンだな・・・」

なのは「じゃあいつくよっつ！模擬戦、スタートっ！！」

そして俺らは、同時になのはさんに向かって突撃していく

ティアナ「リンクはスバルと一緒にウイングロードで突撃！！進路は任せるわ。エリオ！キャラ！ティオ！貴方たちは私と一緒にリンクとスバルの援護！『二色の閃光』の実力、見せてもらいなさいっ！！」

「・・・はいつ！！」

なのは「さて・・・コンビネーション、見せてもらうよっ！！」

そっぴいながらなのはは、一気に30機歩ほどのアクセルシューターを出す。

リンク「攻撃しないって言ってなかったっけ・・・まあいいや、スバル！放物線上にロードよろしく！！」

スバル「了解！！」

ズドンッ！！とスバルがその場で地面を叩くと水色の魔法で作られた道がなのはに向かって伸び始める。

リンク「いくぞ！スバル！」

スバル「おりゃああっ！！」

リンクとスバルはウイングロードを二人で並走してなのはに怒涛の

スピードで突撃していく。

なのは「はいっ……！！でもまだまだ！！」

なのはは10機ほどのアクセルシューターをリンクたちに放つ。

しかしリンクはその攻撃を読んで、スバルに作戦を開始させる。

リンク「行くぞスバル！！作戦ナンバー003、フォーメーション

『^オー！！』

スバル「了解っ！！そおれえっ！！」

突如リンク達が乗っていたウイングロードが裂け、リンクが乗って

いたロードはリンクを上へ跳ね除けるような動きに、スバルのほう

は下のほうへ伸び、さらにスバルを加速させる。なのはが放ったア

クセルシューターは何もない空間を過ぎていく。

なのは「なっ！？」

リンクがロードから離れ放物線上になのはに襲い掛かる。

リンク「うおおおおっ！！」

なのは「くっ……」

なのはは20機残っていたアクセルシューターをリンクに向かって

放ち、プロテクションで身を固める。リンクは一気に打ち出された

アクセルシューターをもともせず、こちらに突っ込んでくる。

なのは「これだけの数の魔力弾をみて動揺しないなんて……さすが

がリン「今だっ！！スバル！！」……えっ！？」

なのはが振り返ると、リングと同じように放物線を描きながら飛ん

でくるスバルの姿があった。

なのは「はいっ……レイジングハート！防御よろしく！」

レイジングハート（了解です、マスター）

アクセルシューターを破ったリングと、不意を付いて後ろから殴り

かかった二人のナックルが、なのはのプロテクションに突き刺さる。

エリオ「……二人とも凄い……」

キャロ「息がすごい合ってる……」

ティオ「りんにかっこいい！がんばれっ！」

ティアナ「あいつらのコンビネーションには付いていけないわ……

まったく・・・」

エリオ・キャロ・ティオは憧れの目、ティアナは呆れ半分の苦笑いを浮かべた。

なのは（なかなかやるね、レイジングハート）

レイジングハート（でも、マスターには敵いません）

なのは（ええ？ 私これでもかなり限界だよ？）

レイジングハート（今の貴方にはリミッターが付いてますから。付いてなかったら先ほどのアクセルシューターも外さなかったでしょう？）

なのは（あはは・・・さて、レイジングハート、どうする？）

レイジングハート（防御は私がやりますので、ご自由に）

なのは（うん、ありがとう。レイジングハート）

リンク「うおおっ・・・かつてえええっ!!」

スバル「おりやあああっ!! 全然碎けないよっ!!」

周りは煙に巻かれてて見えない、そんな時にリンクは一瞬だが、プロテクション内から大きな光を見た。

リンク（あれは・・・まさかっ!？）

思い当たる節を見つけるとスバルに向かって叫んだ。

リンク「一旦引くぞ!! なんかやばい!!」

なのは「御名答」

スバル「・・・うおっ!？ 何あれっ!」

なのはの持つレイジングハートの先端は既に砲撃モードに入っており既に砲撃魔法の準備が整っていた。

なのは「身に痛みを知ってるっていうのも訓練だから」

リンク「・・・ティアナ、エリオ、キャロ、ティオ! 援護を!!」

「・・・はいっ!!」

既にリンクとスバルが作った5層プロテクションの上にさらに5層

のプロテクションがかかる。

なのは「そんなもので防げると思ってるの？」

リンク「え……」

既になのはの魔方阵は完成しており、腕を振り下ろせば放てるという状態だ。回避は不可能。

なのは「じゃあ受け止めてね！！私の全力全開！！アクセル……デイバイン……バスター……！！」

なのはの前面からアクセルシューターをまとったデイバインバスターがリンクたちの張ったプロテクションに激突する。

ティアナ・エリオ・キャロ・ティオ「うぐぐぐう……」

ティアナ達が張ったプロテクションが1枚……2枚と徐々に破壊されていく。

そしてリンクたちが張ったプロテクションに差し掛かった。

リンク「うおお……！！なんつー威力……！！」

スバル「このままじゃ防ぎ切れないよ……どうしようっ！！」

リンク「……スバル、ウイングロード出せるか？」

スバル「……何する気？」

リンク「最後のプロテクションが割れた瞬間に俺とお前でウイングロードを使用したパンチを叩き込む」

スバル「……危険な賭けだねそれ……」

リンク「でも、やってみなきゃわかんねえだろ？（にやつ）」

スバル「……リンのにやにや顔気持ち悪い」

リンク「ひでえなあ……で、やってみるか？」

スバル「ええ……いくよっ！！」

ウイングロードが砲撃の下をなのはの方向へ走っていく。砲撃中のなのはも戸惑いを隠せない。

なのは「……何する気なんだろ……レイジングハート！！出力UP！！」

レイジングハート「all light my master」
さらに砲撃の威力が上がる。2個プロテクションが吹っ飛んだ。残

り1つ。

リンク「セーのでいくぞ！スバル！！」

スバル「準備OKえ！！」

リンク・スバル「「せえーのっ！！」」

パリン。最後のプロテクションが割れる。桜色の壁が迫ってきているというのに2人は怖さを感じなかった。

・・・ズドンッ！！

二人の小さい拳が、大きな砲撃に突き刺さる。

小さいながらも、砲撃を押し返していく。

なのはは驚きを隠せない。

なのは「プロテクション無しで砲撃を防いでるのっ！？無茶苦茶だよっ！！」

さらに出力がUPする。

リンク「うおおおおおおっ！！」

スバル「うああああああっ！！」

既に二人の姿は見えない。しかし彼は聞いた。

リンク・スバル「「今だ！！エリオ！！」」

エリオ「・・・っ！！ソニックムーヴ！！」

エリオが銃型デバイスを構えて突進する。

なのは「なっ！？」

なのはが気づく頃には遅かった。

プロテクションを起動するが一足エリオが早かった。

プロテクションに阻まれ銃形デバイスは動きを止めたが・・・なのはの腰に僅かながらエリオの槍が食い込んでいた

なのは「まったく・・・なんであんな無茶するかな、はあ」
なのははため息混じりに首を振った。

シャーリー「でも良い結果が取れましたよ」

なのは「でもさぁ・・・肝心のリンクとスバルが怪我しちゃねえ・・・」

シャーリー「怪我させるような攻撃をしたのはなのはさんですよ（ニヤニヤ）」

なのは「・・・うー」

リンクとスバルは動けないのかボロボロのバリアジャケットのまゝ担架に乘せられて医療室に向かった。

運ばれてる最中、リンクはスバルに話しかけた。

リンク「俺ら、頑張ったな」

スバル「うん、頑張ったよ」

二人は運ばれながら、子供のような笑みを浮かべていた。

序章「出会い、そして模擬戦」（後書き）

このSSはオリジナルキャラクターを加えての再構成になります。
このSSはオリジナルキャラクターを加えての再構成になります。
大事なので2回言いました。

忘れてましたよ…

オリジナルキャラクターとか要らないから！と思う方はなのはシリーズで好きなカップリングを載せコメントに。

もしかしたらR - 15 指定入った甘々話を番外編で書くかも。

というかえろいの好きなんで言われたら書きます。ええ（断言）

主はエロイラスト描くときだけ本領が出るのですが、もしかしたら文もそうなんじゃないかなあ…と。

言われなくてもリンクとスバルの惚気話は番外編で書くよ！

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!」序章

大まかなオリジナルキャラクターの紹介です。

リンク「ザ」フォンティナ

本作の主人公その1。近代ベルカ陸戦近接式魔術ランクB+、魔力ランクA-の執務官「志望」だった少年。18歳。

執務官育成学校所属中だった彼に、機動六課を設立した八神はやてが目を付け半場強引に引き抜き。

彼自身は引き抜かれたことに反論はせず、むしろ憧れのフェイト執務官の仕事を間近で見ることが出来ると知って軽く興奮気味。

本作では試験さえ受けて合格すれば執務官になれるので執務官学校に1年機動六課に留学させてもらうということで話がついている。

名前の通り、幼い頃からタイミングを合わせることが得意で、いまや時空管理局のヴィータ副隊長の突撃にすら合わせることが出来るように。

コンビネーション能力はずば抜けて高い能力を持っている。

彼の専用デバイスはまだないが、執務官が戦闘を行うこともあるので学校で支給されたスバルと同じナックル型のストレージデバイスを使っている。

スバルとは昔から仲のよい友達で、訓練で危険度が低いロストロギアの収集でたまに一緒になり、恐るべきコンビネーションを発揮し中々の知名度を持っている、仲間や管理局には「2色の閃光」という名前で呼ばれているほどだ。

リンクは執務官志望だったためか、その場にあわせた攻撃コンビネーションを即座に作り出すことが出来る。スバルと同じく近接攻撃しか持ち合わせていないため（後々砲撃を使うようになる予定）基本的にスバルと一緒にウイングロードで突撃する方法になっている。（まだリンクはウイングロードを使えないため、スバルのウイング

ロードに乗っている)

得意技 コンビネーションアタック・相手の動きに合わせること
友人からはリンの名で呼ばれることが今度多くなるだろう。

ティオール＝ランドルク

本作の主人公その2。近代ミッドチルダ広域砲撃式魔術ランクB -、
魔力ランクA - の女の子。10歳。
ある次元で勤務中のフェイト・T・ハラウンに助けられ、身寄りの
なかったティオールはそのままフェイト・T・ハラウンについて
くることに。

テストロッサの教育で、ライトニング部隊として機動六課に加入。
主に後方からの援護を得意にしている。

大掛かりな砲撃魔法は使えないが、アクセルシューター、バインド
などの基本魔法のコントロールだけはなのはたちと同じくらいのA
+ ほどのずば抜けた能力を持っている。しかし機動力等がないの
で、技術的にはB - ほどに落ち込む。

テストロッサやなのはに育てられたせい、好奇心旺盛で明るい女
の子である。それと同時に場の空気を和らげるムードメーカー、な
いしトラブルメーカーでもある。

アクセルシューターを思念誘導し、見えない数キロ先の的にぶつけ
ることが出来るので、広域探索魔法や結界魔法など、補助的な魔法
が多く取り揃えられている。

得意技 遠距離からのアクセルシューター思念制御
なのはたちからはティオと呼ばれている。

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!」序章

大規模模擬戦編に入ります。

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!」1章

大規模模擬戦編です。

アニメとは違い、早くもデバイスが完成します。

でもまだ調整中なので調子が整ってなかったり…

それによってある人がトラブルに巻き込まれます。

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!」1章

俺達が機動六課に配属されてから一週間が経った。

だんだん慣れてきた俺は、フォワード陣だけの時は自分の事を俺と呼ぶようになっていた。まったく適応力というものは恐ろしい。

そんなこんなで一週間。訓練と簡単な任務をこなしていた俺たちだが、どういうわけかフォワード陣が持っていたストレージデバイスが偶然にも同時に壊れてしまった。

なのはさんの話によると殆ど皆の新しいデバイスは出来ているらしく、今日から新しいデバイスで訓練をするので、皆を引き連れて開発室にまで来いという通信があった。

リンク「・・・と、俺は誰に説明してるんだ」

スバル「リンク？何をぶつぶつ言ってるの？もう着いたよ？」

リンク「っと」

気がつくとも既に開発室の前まで来ていた。

ティアナ「失礼します、機動六課フォワード部隊です」

なのは・シャーリー「いらっしやーい」

身近な机でお茶を飲んでる、なのはさんとシャーリーさんの姿があった。

なのは「全員来たね。ちょうど良く皆の新しいデバイスが完成したよ」

シャーリー「どうぞこちらへ」

なのはさんとシャーリーさんに連れられ、開発室の奥へと進んでいく。

リンク「これは・・・」

比較的大きな広間に、巨大な試験管のような容器が六角形の形で並

んでいた。

ティアナ「これが・・・私たちの新しいデバイス・・・」

なのは「皆の戦闘スタイルに合うように調整してあるからね。こないだの模擬戦を見る限り今までのデバイスと同じ形態のデバイスのほうが良いかなって思ったし」

スバル「・・・ナックル型のデバイスが二つあるよ?」

シャーリー「スバルとリンクのよ?良かったじゃないスバル、新しいデバイスでもリンクと一緒によ?(ニヤニヤ)」

スバル「・・・ふええ・・・ノノノ」

顔を真つ赤にさせるスバル。俺には理解できないが、何か恥ずかしいことでもあったのだろうか。

リンク「・・・ナックル型の俺たちは靴も新調ですか?」

シャーリー「ええ。というかその靴が貴方たちのデバイスの本体よ。それとナックルをあわせて一つのデバイスとも言った方が良いでしょうね」

なのは「・・・さて、皆、自分たちのデバイスの前に立って。そして自分達が考えた名前を呼んであげるのよ」

「「「「「はいっ」「」「」「」」」」

ティアナ「マスター認証、ティアナ・ランスター。デバイス名、クロスミラージュ・・・おいで」

クロスミラージュ（・・・貴方が新しいマスターですね。これからよろしく願います）

エリオ「マスター認証、エリオ・モンディアル。デバイス名、ストラーダ。よろしくね!」

ストラーダ（元気なマスターだな、よろしく頼む）

キャロ「マスター認証、キャロ・ル・ルシエ。デバイス名、ケリュ

ケイオン。よろしくだよ。ケリユケイオン」

ケリユケイオン（貴方は私が守ってみせましょう）

ティオ「マスター認証つ、ティオール」ランドルク！デバイス名、インフィニティ・ハート！よろしくつ、インフィちゃんっ！」「インフィニティハート（可愛いマスターですね、よろしくお願いします）います」

スバル「マスター認証。スバル」ナカジマ。デバイス名、リボルバーナックル及び、マツハキャリバー。よろしくだよ、マツハキャリバー。」

マツハキャリバー（貴方と最速を目指しましょう。よろしくお願いします）

リンク「最後は俺だな。マスター認証。リンク」ザ」フォンティナ。デバイス名、シリンダーナックル及び、ブラストキャリバー。よろしく頼むよ」

ブラストキャリバー（姉のマツハキャリバー共々、よろしくお願いします）

リンク「・・・なんだって？」

ブラストキャリバー（マツハキャリバーと私は姉妹です）

スバル「・・・えええっ！？」

なのは「姉妹関係の方が上手く合わせられるかなと思って」

シャーリー「コンビネーションが命な貴方たちにはぴったりね」

リンク「・・・はあ、まあいいや。スバル」

スバル「・・・ふえっ／＼、ななな・・・なに？」

リンク「これからもよろしく頼むよ、二人で最高のコンビネーション、作り上げようぜ（ニコッ）」

スバル「・・・／＼、よよ・・・よろしくお願い・・・しま・・・す・・・／＼」

スバルは俺と握手をしているが、顔を赤くして頭を下げている。熱でもあんのかなー。

ティアナ「・・・あいつの鈍感な酷いわね・・・いつスバルの気持ちに気づくやら・・・はあ・・・」

ティアナは深いため息をつき、自分のデバイス、クロスミラージュを見る。

ティアナ（こんな仲間たちだけど、頑張っで行こうね、クロスミラージュ）

クロスミラージュ（貴方の為ならなんなりと）

マツハキヤリバー・ブラストキヤリバー（今後の二人に期待ですね・・・）

意外と恋バナが好きなデバイス姉妹だった。

なのは「じゃあ、新しくなったデバイスで訓練しようか！」

「・・・・・・はいっ！！」「・・・・・・」

なのは「てことで、フェイトちゃんと私対フォワード陣大規模模擬戦、始めるよ！」

「・・・・・・ええっ！？」「・・・・・・」

なのは「えっ・・・？何でフェイトちゃんも驚いてるの・・・？」

呼び出されていたフェイトは焦りながらなのはに答える。

フェイト「だ・・・だって皆は新しいデバイスを会ったばかりだよ・・・？そんないきなり私たち相手に模擬戦だなんて・・・」

なのは「ちまちま訓練するより、新しいパートナーと思いつきり戦ってみる方が大きい成果が出る気がするんだっ」

リンク達はなのはの言い分に苦笑する。

リンク「良いですね、やりましょう。僕のブラストキヤリバーも戦いたくてうずうずしてるみたいですし・・・皆もやってみたいよな？」

スバル「新しいデバイスと最初っから思いっきりやるのか・・・楽しそうっ!!」

ティアナ「どんな子達なのかも分かるしね、ね?クロスミラージュ」
クロスミラージュ（私は模擬戦練習に賛成させてもらいます）

ティオ「インフィと一緒に頑張るもんっ!」

インフィニティハート（一緒に頑張らしましょうね）

次々と模擬戦賛成の声が上がっていく。戸惑ってるのはフェイトだけだ。

フェイト「ええっ・・・しょうがないなあ・・・じゃあ私も参加するよ。エリオとキャロ、ティオが強くなってるのか見たいし」

なのは「じゃあルールはこうだね。基本的に一対三の戦いで、フェイト対エリオ、キャロ、ティオ。私対リンク、スバル、ティアナって所かな。この間は一発入れれば勝ちってことになってたけど、今回は本気の勝負!フェイトと私が撃墜されるか、フォワード陣が全滅するかの勝負にするね!!」

リンク「それで行こうか、スバル、ティアナ、よろしくな」

スバル・ティアナ「よろしく（ねっ!）（頼むわよっ!）」

フェイト「私の相手は子供たちかぁ・・・よろしくね」

「お母さんよろしくー!!」「」

フェイト「・・・ちよつとやりずらいかも・・・」

フェイトはため息交じりの苦笑いをした。

なのは「今回は荒野でやりましょうか、ステージセット・・・つと一瞬にして訓練施設が風が巻き起こる荒野に景色を変える。

エリオ達は既に遠くにいるらしく、ここには四人しかいなかった。

なのは「さて・・・新しいデバイスでの始めての戦いだね。セットアップよろしく!!」

リンク「プラスチックヤリバー、Setup!!」

プラスチックヤリバー(Stand by ready / OK / Setup.)

リンクが紅の光に包まれる。

スバル「うわっ・・・眩しい・・・」

ティアナ「何・・・この魔力量・・・」

なのは「リンクはずっと支給されたデバイスを使ってたからね、リンク専用で作られた新しいデバイスだからでこそ、出せるものも出せるようになるんだ。・・・というか、この魔力量・・・並みの魔導士達を軽く超えてるね・・・今までの魔力で私のプロテクションを破りかけるんじゃない、この魔力量なら私の今のプロテクションを破れるかも」

リンク「・・・っと、バリアジャケット装備。・・・なんか凄いデザインだな」

リンクの体には、動きやすい簡略化されたライダースーツの物のほかに、足のかかとに届きそうなくらいの大きなマントが付けられていた。

スバル「・・・かつこいいよ、リンク」

リンク「・・・突然何を言い出すスバル」

ティアナ「へえ・・・ナツクルも足回りも凄く良い出来ね」

リンク「重過ぎないナツクル、軽量な足回り・・・さすがシャーリーさん、良いものを作ってくれました」

なのは「そういつてくれると嬉しいな。シャーリーにも喜んでたよって伝えとくね」

リンク「ありがとうございます」

スバル、ティアナも装備を済ませ、模擬戦開始のスタート位置に付く。

なのは「さて・・・どこまで自分のパートナー達と心を交わせるか、試させてもらうよっ!! Ready……Start!!!!!!」

そして管理局のエース・オブ・エースとフォワード陣三人組の模擬戦の火蓋が、切って落とされた。

フェイト「・・・なのはたちは始めたみたいだね。 私たちもやるよ。バリアジャケットよろしくね」

「・・・はいっ!!」

ティオ「インフィニティハートツ!!セエーツト、アアーッブツ!!」

ティオの姿が変わっていき、右手に身の丈を超える大きな杖が構築される。

ティオ「インフィ、おっきいねっ」

インフィニティハート（持ちづらいですか?）

ティオ「うんっ、インフィ軽くて扱いやすいよっ」

インフィニティハート（それは良かった。シャーリーに軽量化を施しておくように頼んであったのです）

ティオ「えへへっ、ありがとインフィッ」

エリオ、キャラもバリアジャケットを装備する。

フェイト「さて・・・あまり怪我はして欲しくないからこっちはちよっと手加減するけど・・・エリオ達は構わずに攻撃してきてね」

「・・・はいっ」
フェイト「じゃあ・・・どれだけ強くなったか見せて貰うよ・・・
Ready……Start!!!!!!」

そしてフェイト達の模擬戦も、始まっていく

フェイトside

ティオ「キャロツッ!! 転移っ!! 多分結構高いところまで!!」
キャロ「了解ですっ」

ティオが何処かは分からないが転移されていく。

フェイト「... 何処に転移したんだろうか。まあ大規模なサポート魔法を発動させる為に転移させたとは思えな...っ!？」

突然にフェイトの身体に重力が重く押し掛かる。

フェイト「... なにこれ... 身体が重い...っ!？」

フェイトside end

エリオside

エリオ「... ティオさんの魔法が発動したみたいですな」

フェイト「... こんな魔法喰らったことないんだけど」

ティオがわざわざ全体念話で話す。

ティオ「この間覚えてたんだっ。グラビティバインドっていう魔法なんだけどなあ... 本来なら敵を押しつぶしてしまえるんだけどまだまだ出力不足...」

フェイト「ティオならもつと強い魔法が出せるようになるよ」ニコッ

ティオ「... えへへっ。そうか「隙有りっ」... ええっ!？エリオ君危ないっ」

エリオ「えっ」

とんっ。

エリオの意識はそこで途絶えた。

エリオ side end

キャラ side

なんかフェイトお母さんが凄く速さでエリオくんに接近して一撃でエリオ君を気絶させてしまいました…。

キャラ、絶賛困惑中。

フェイト「うーん…いつもより速度は出ないなあ…」

キャラ（あれでグラビティバインドが効いてる状態なのっ！？ティオ！？）

ティオ（うーん…フェイトお母さん、恐るべし…。どうしようか、キャラ、私のところに転移できる？）

キャラ（うんっ。わかったっ）

フェイト「さて…あとはキャラ…「作戦タイムッ！…ごめんフェイトお母さんっ！…」…えっ」
しゅんっ。

キャラ side end

フェイト side

キャラの姿が消える。転移魔法を使ったようだ。ご丁寧に何処に飛んだか分からないように使ったみたい。

フェイト「中々転移魔法だけはうまいじゃない…何処に行ったのかしら…」

そんな風に考えていると体の重みが消えた。

フェイト「…グラビティバインドは解除されたみたいだね。援護組二人で何処までできるのか…見させて貰…」

そんな時だった。

シュー…

フェイト（…何か飛んできてる？）

フェイトは振り向いて後ろを見る。

フェイトの身長を優に超える球体のシューターが迫ってきていた。
フェイト「なにあれっ!？」

フェイトは回避行動を開始する。が思念誘導されているのか避けても避けても追いかけてくる。

フェイト(…バルディッシュ。プロテクションを)

バルディッシュ「Yes sir。」

フェイトの腕にミッドチルダ式の円形防御壁が出現する。

そのプロテクションに巨大なシューターがぶち当たる。

フェイト「…なんていう威力…っ」

フェイトはプロテクションで防御しながら、バルディッシュを使ってシューターの威力を物理的に削っていく。

そして、なのはの使うシューター並みに小さくなったシューターをみて、フェイトは止めを刺そうとバルディッシュを大きく振り上げて…振り下ろした。

シューターは真っ二つにわれ、降下を始めた。

フェイト「ティオも中々に強い魔法をもって…」

その時だった。

ぴしっ。

真っ二つに割れて降下を始めていたシューターに、罅が入り中から激しい光があふれ出す。

フェイト(…!?!まさか…爆発!?)

フェイトのプロテクションが発動させるにはあまりにも短い時間だった。

シューターの罅は広がり中から光の本流が溢れ、そして。

爆散。

防御無しにまともなのはのディバインバスター並みの攻撃を喰らったフェイトは軽々と吹っ飛んだ。

フェイト（いったあゝっ…あそこまで削ってあの威力…周りは只の拡散した魔力だったってこと…？）

フェイト「とにかく…あんな攻撃また喰らうわけには…」

フェイトが立ち上がる、そんな時だった。

びーびーびー。

フェイト「…緊急通信っ！？ティオ！キャロ！一旦模擬戦中止！戻ってきなさいっ！！エリオも起きてっ！！」

新たな任務を告げる通信だった。

なのはside

なのは（この間の模擬戦ではギリギリ負けたけど、今回は負けないように頑張ろうね、レイジングハート）

レイジングハート（マスターとなら出来ます。ところで、リンク達の新デバイスですが、力は未知数です、注意しましょう）

なのは（ありがと、レイジングハート、じゃあ、始めよっかっ！！）

なのはside end

リンクside

リンク「ティアナ！援護射撃を頼む！！」「分かったわ！！」「スバル！俺と突撃！！」「了解！！」…さて、よろしく頼むぞ！ブラストキヤリバー！！「all right！！」…ナンバー002、フォーメーション『？！！』、行くぞ、スバル！！」

スバル「ウイングロードは？」

リンク「俺も出せるようになった！行くぞ！」

スバル「了解！いっくよっ！！」

ドンッ！！

以前の模擬戦で使ったような、縦のウイングロードではなく、左右

両方からスバルの水色のウイングロード、リンクの明るい紅色のウイングロードがなのはに向かって伸びていく。

スバル・リンク「おおおおおっ!!」

爆発的な加速、以前の速度を大幅に凌駕していた。一瞬にしてなのはのそばに到達する。

スバル・リンク「てえええいつ!!」

スバルとリンクは真正面からなのはに殴りかかる。

なのは「レイジングハート、プロテクション!」

レイジングハート「all right my master」

前回と同じようなのはは二人の攻撃を受け止める。

なのは「・・・っ!以前より強い!レイジングハート!受け流すよ!」

レイジングハート「Accel Shooter」

二人のナツクルの真横にプロテクションの内側から放たれたアクセスルシューターが突き刺さる。

目標を逸らされた二人は踏鞴を踏んで一瞬ながら隙を作ってしまう。
なのは「ボデイがから空きだよ」

なのはが二人の身体に砲撃を打ち込もうとする。

ティアナ「させないわっ!!」

ティアナのクロスミラージュが火を噴きなのはを牽制、双方距離をとる。

動き出したのはなのはだった。

なのは「デイベイン!!バスター!!」

ありえないほどの詠唱速度で大規模な砲撃魔法を放つ。

ピンクの直線砲が三人に迫る。動いたのはリンクだった。

リンク「ロードプロテクション!!」

ブラストキャリバー「all right」

リンクが目にも留まらぬスピードで地面を叩き。ウイングロードを出現させる、しかし、回避用に出したわけではない。

リンクの出したウイングロードは地面をのたうち、波型の多重壁を

完成させる。

ウイングロードの先端になのはのディバインバスターがぶち当たる。ウイングロードはばねの力を利用し、上手く横へディバインバスターを受け流した。

なのは・スバル・ティアナ「…あんな使い方があったなんて聴いてない（よ！）（わ！）」

リンク「飛行機並みに早い人間が走るんだぜ？そのくらいの強度があるって事だろ…」

スバル「私もやりたい！」

リンク「後で教えてやる。模擬戦を続けるぞ！！次！スバル！俺はお前に合わせる！」

スバル「了解！ウイングロード！！」

スバルの足元から新たなウイングロードが現れる。なのはまでのきよりは約150メートル。一直線にウイングロードが伸び始める。

爆音を立てながらスバルはなののはに向かって突撃する、残り130メートル。

なのは「レイジングハート！！お願い！！」

レイジングハート「all right」

なのは「アクセルー…シューッ！！」

なのはから約50発のアクセルシューターが打ち出される。残り100メートル。

スバル「…っ！ティアナ！よろしく！」

ティアナ「りょーかい！」

ティアナのクロスミラージュから雨の様に弾丸が打ち出され、大半のアクセルシューターが打ち落とされるが、残りいくつかのシューターがスバルに迫る。残り50メートル。

スバル「くっ…」

スバルは回避のために失速しようとする。

リンク「避けなくて良い！俺がやる！うおおっ！！」

ウイングロードで後から追いついてきたリンクがスバルの眼前に迫

つていたシューターをパンチで根こそぎ打ち落とし、並走する。残り30メートル。

リンク「行くぞー！スバル」

スバル「うんっ！」

なのはに弾丸の様に突撃する二人。異変が起きたのはその時だった。マツハキヤリバー「State-of-emergency generating!（緊急事態発生）」

スバル「っ!?何!?!」

マツハキヤリバーが警告を発すると共に、マツハキヤリバーの駆動が止まり、スバルのウイングロードが突如消えてしまう。

スバル「つきやあああああああつー!!」

荒野の地面は硬いゆえに、空中200メートルほどから生身で落ちたらひとたまりも無い。

リンク・なのは・ティアナ「スバルッ!!」

リンクは最小限の旋回で手をスバルに向かって伸ばす。

リンク（…だめだっ!!届かねえっ!!なくなるうえは…!!）

なのは「…!?リンク!!何する気なの!!止まって!!」

リンク「スバルが危ねえんだ!何としても助け出す!!俺が怪我してもだ!!」

ティアナ「リンクッ…!!」

リンクがウイングロードを使い急降下を始める。ウイングロードが行き着く先は…地面。

リンク「スバルウウウウッ!!」

スバルが地面に叩きつけられる直前にリンクは高速でスバルの下に回りこむ。そして。

ズドンッ!!!（ビキビキッ）

リンク「うぐあっ…!!」

スバルはリンクによって受け止められたが、リンクは物凄い勢いで地面に叩きつけられた。

なのは・ティアナ「リンクッ!!」

リンク「……………」

なのは「気を失ってる！！ティアナ！！急いで救護班を！！……って
何！？こんな時に通信……っ！？緊急通信！？？」

リンクside end

???side

???「さあ……！！物語の始まりだよ！！あっはっは……！！」

こうして、ファーストアラートは鳴り響く。

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!」1章

リンクさんが怪我しちゃいました。

リンクさんが怪我しちゃいました。

主人公補正で2回言いました。

主人公が怪我して気を失うってどうよ？大丈夫、ぴんぴんしてるから。

次の話はファーストアラート編。前編と後編に分かれる長編になります。

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!」1章

オリジナルキャラクターのたまかなデバイス紹介です。
仕様はどんどん変更していきます（え

シリンダーナックル& a m p ;プラスチックキャリバー

リンク用に調整されたナックル型インテリジェントデバイス。

同時に製作されたスバルのリボルバーナックル改良型& a m p ;マツハキャリバーとは姉妹機に当たる。本作ではデバイスの繋がりが強いとコンビネーションが上手くなると強引に設定

ベルカ式カートリッジシステム搭載。

魔力光は明るめの紅。リンクが名づけた『プラスチック』の名はここから来ている。

主に使用可能な魔法

ウイングロード

スバルと同じ、しかしスバルのは水色の道に対し、こちらは紅色の道を形成する。色に違いがあるだけで、能力等はスバルのと大差は無い。

ジェットパンツァー

スバルのナックルダスターと同系統に当たる。

威力はスバルのそれを優に超えている、使用者がリンクという力のある男性だからか。

シリンダーナックルにはヴィータのグラーファイゼンのようにジェット機能が付いており、カートリッジを使用することで威力が数倍にも膨れ上がる。しかし使用者のリンクの魔力はヴィータほど多くないため、シリンダーナックル側で魔力の維持等を行っている。

シリンダーショット

拳の前に魔力弾を形成し、殴って相手に飛ばす直線砲撃魔法。殴る強さによって飛んでいく速度が違う。

後にこの技がリンクの必殺技の原案になっていく。

インフィニティハート

ティオールが持つことになったインテリジェントデバイス。

人格はお姉さんタイプ。

モデルはなのはのレイジングハート。レイジングハートより砲撃能力に劣り、思念制御や援護魔法を駆使する能力に勝る。

ミッドチルダ式のティオールのデバイスだが、リミッター付きのベール式カートリッジシステムが付いている。いざという時は親に当たるフェイトなどの使用許可が出る。

主に使える魔法

コントロールシューター

なのはのシューターは数多くを制御して相手を翻弄するが、ティオールのシューターは身の丈を優に超える巨大なシューターを単発で出し、相手を遠距離から追い詰めるタイプだ。

そのシューターが爆散した時の威力は申し分なく、なのはのディバインバスター並みの威力に当たる。

ロングサーチ

かなりの広域をサーチ出来る魔法、しかし使用中は動けない。

パワーケース

広域克強力な結界を張ることが出来る。なのはのアクセルシューターでは太刀打ちできないほどの強度を誇る。これも、使用している間は動けない。

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!」1章

ファーストアラートが鳴り響く。

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!」2章

ファーストアラート編前編です。

リンクが居ない中、5人のフォワード陣が暴走列車に乗り込みます。

今回はライトニング部隊が主なスポットです。

あと頼れる兄貴なお話。

問題の現場に向かう機動隊ヘリの中で、スバルは俯いて自分を痛めつけていた。

スバル（　　のせいだ、わた…のせいだ…私のせいだ　　！！）

スバルは、何度も座っているソファを叩く。

なのは「スバル…貴方のせいじゃないわ、マツハキヤリバーが貴方の魔力に対応できなかっただけじゃない」

スバル「でもっ…！！そのせいでリンクがつ…！！」

ティアナ「あいつはスバルを守るために行動したのよ？貴方がそんなでどうするのよ」

マツハキヤリバー（私の不可抗力です、気にしないで下さい、マスタ―）

スバル「わかんないよ…なんでリンクが怪我しなきゃいけないのよ…なんでリンクが怪我するだけでこんなに胸が苦しいの…？」

なのは「スバル…」

なのはとティアナ、マツハキヤリバーはスバルがどんな気持ちなのか、分かったような気がした。

きつと、スバルとリンクはずつと昔からお互いのことが好きなのだ。近すぎた故に、その気持ちに気がついていない、スバルも、おそらくリンクも。

だから、リンクは愛する人を傷つけないが故にスバルを怪我しなくても救い、スバルはスバルで、愛する人が傷ついてしまったことが物凄く痛いのであろう。

皆が空気を重くしていた時、あるものが口を開いた。

ブラストキヤリバー（スバルは悪くありません。それに、マツハ姉さん）

スバル「えっ…？」

ブラストキャリバー（マイマスターは、実は怪我をしないで済んだのです、スバルを地上スレスレでキャッチして、再びウィングロードで舞い上がることも出来たはずでした。ですが、マスターはそれをしなかった。それが何でか分かりますか？スバル）

スバル「…どうして…？」

ブラストキャリバー（貴方の身体に負担をかけない為です、スバル。貴方はあの時生身の人間でした。もしあの角度で急旋回していたら、風圧や気圧で貴方の節々の骨が折れかねません、マスターは、それを考慮してわざと地面にぶつかったのです、勿論、貴方をかばいながら）

この事実には誰もが驚いた。自分が怪我をしなくて済む道があったのにそれを捨ててまでもスバルに怪我をさせない為に動いたのだ。

ブラストキャリバー（そして、マイマスターは気を失う寸前、声には出せなかったものの、私に一つメッセージを残しました。スバル、貴方に『気にするな』と言っておけとの事ですょ？それでもまだよくよしていられますか？スバル？）

スバル「リンク…私は…」

操縦士「高町教導官！！問題の列車が見えました！！」

ヘリの先にはありえない速度で走る列車が見えてきた。

なのは「あの中にレリックがあるわ！！今回の任務はその回収！

！そして、敵対勢力、ガジェットドロンの殲滅！！…あれはっ！？」

操縦士「このヘリに多数の飛行型ガジェット接近中！！迎撃準備を

！！」

フェイト「OK！！なのはと私で迎撃するよ！！フォワード陣は後で列車に直接乗り込み、レリック回収及び地上型ガジェットの殲滅！！OK！！」

「……はいつ!!」「……」

一人足りないフォワード陣が、元気良く返事をする。

なのは「まずは列車の上にいるガジェットを殲滅!その後に列車内に乗り込んでレリックを回収するよ!!行くよ!!フェイトちゃん!!」

フェイト「うんっ!!」

二人はすばやく変身し、ヘリから飛び降りていく。空戦魔導士であるからこそ、飛行型ガジェットの迎撃には向いているのだ。ヘリの中には、フォワード陣が取り残された。

エリオ「…キャロ、緊張しているの?」

キャロ「…うん」

エリオ「一緒に頑張ろう?きつと上手くいくから」

キャロ「でも…怖い…」

ティオ「もーっ!!なんでそんな暗いのっ!?スバツとドカーンとやっちゃいましょうよ!!ね!!エリオ、キャロ!!」

エリオ「…そうだね!!」

キャロ「…うん!いつもどおりにやればいいんだっ!怖くなんてないよ!!ありがと!ティオ!」

ティオ「やつとやる気出してくれた?一緒にがんばろっ!」

「…うんっ!!」

ティアナ「…スバル。行ける?」

スバル「…うん」

ティアナ「リンクは死んだわけじゃないわ。まずこの任務をさっさと終わらせて、リンクの看病すべきじゃない?」

スバル「…そうだね。早くリンクに逢いたい」

ティアナ「じゃあさっさと終わらせましょ!行くわよ!!」

「…おうっ!!」

二人の拳が重なる。

操縦士「まもなく列車の上に到着します！！フォワード陣、準備を
！！」

「「「「「はいつ！！」「」「」」

ティオ「いつくよー！！」

ティアナ「皆手を！！」

「「「「「せーのっ！！」「」「」」

フォワード陣はヘリから飛び降りる。ヘリに残されたのは待機状態
のブラストキャリバー。

ブラストキャリバー（頑張ってくださいね、5人とも）

その時、ブラストキャリバーに通信が入った。

リンク（緊急任務中か？）

ブラストキャリバー（気がつきましたか、マスター。今回は5人で
何とかするみたいですから、ゆっくりと休養を…（断る）…っな！
？マスター！？）

リンク（俺は現場に行くぜ、ブラストキャリバー）

ブラストキャリバー（そんな…まだ身体が治ってないでしょう！！
無理はするものではありません！！）

リンク（わりーな、ブラストキャリバー。まだ、俺はスバルを救い
きれてねえんだ）

ブラストキャリバー（…どういことですか？マスター）

リンク（なんかいやな予感がするってこった。スバルが怪我するの
は見てらんねー。てことで頼むよ。ブラストキャリバー）

ブラストキャリバー（…まったく。そろそろ自分の気持ちに気づい
たらどうですかね？マスター？）

リンク（気持ち？何のことだ？）

ブラストキャリバー（…ダメですねこれは…。まあ、分かりました。
操縦士やなのはさんには、こちらから話を付けておきましょう）

リンク（悪いな、ブラストキャリバー。わがままにつき合わせちゃって）

ブラストキャリバー（いやな予感がするのは私も一緒ですよ。マスター）

リンク（…ははっ）

ブラストキャリバー（…ふふっ）

リンク（お、笑うなんて珍しいじゃないか、デバイスなのに）

ブラストキャリバー（進化してるんでしょね、貴方に持たれてから）

リンク（これからも頼むぜ、ブラスト）

ブラストキャリバー（ええ、私からも頼みましょう。頼みます、姉とスバルを）

リンク（じゃあ向かうとしますか。テレポートは使えるか？）

ブラストキャリバー（座標はもう設定してあります。あとはマスターの魔力で扉を開くだけです）

リンク（了解。よし、行くぞ）

ヘリ内にテレポートが開かれ、中からリンクが飛び出す。

ブラストキャリバー（…ぼろぼろじゃないですか）

ブラストキャリバーの言うとおり、リンクの身体の所々には、何十にも巻かれた包帯が見えた。

リンク「骨が折れなかったのが不思議なくらいだな。ちょっと痛むが平気さ」

操縦士「…えっ！？リンク殿！？」

リンク「わりーな。来ちまった。なのはさんに通信つなげられるか？」

操縦士「…了解しました。高町教導官。リンクが通信所望です」

なのは（…えっ？リンク！？なんで此処に！？休んでないとダメじゃない！！）

リンク「すみませんがなのはさん。俺もこの作戦に参加させていただきます」

なのは（でも…っ！身体はまだ…！）

リンク「骨は折れてないので平気です。…それより、いやな予感がするんです。頼みます、なのはさん。俺に出させてください！」

なのは（…無理は禁物だよ、リンク。あまり本気出さないこと。あと帰ったら無断で病院を抜け出したことについて反省文30枚ね）

リンク「…了解です。有難う御座います。なのはさん」

なのは（…早くスバルのところに行つてあげて。スバルとティアナを頼んだよ…！）

リンク「言われるまでもなく…！行くぞ…！ブラストキャリバー…！」

ブラストキャリバー「all right my master」

そしてリンクも、戦場へを降り立っていく。

ティアナ「エリオとキャロとティオは外からガジェットを殲滅！スバル！私たちは内部に入つて殲滅とレリックの回収をするわよ…！」

エリオ・キャロ・ティオール「…はいつ…！」

スバル「りょーかい！ティア！」

スバルが天井部分に穴を空け、ティアナとスバルが内部へと侵入していく。

エリオ「この穴を基点にガジェットを中に入らせないように動こう…！穴から離れた所に外のガジェットをレポート！できる！？キャロ！」

キャロ「分かった！」

様子見をしていたガジェットの下に魔方陣を引くが、

キャロ「…っ！？飛ばせない…！？」

そこでなのはの通信が入る。

なのは「ガジェットにはAMFが標準装備させられているよ…！並

大抵な魔法は全部効かないジャマーシールド!!」

ティオール「ええっ!じゃあどうすれば良いのっ!？」

なのは「エリオの槍で直接攻撃するか、よっぽど一点を強力にした砲撃じゃないと…」

その時だった。

インフィニティハート『S o n i c S h o t』

ティオール「撃ち抜けっ!!」

極限まで範囲が狭められた高速弾が、ガジェットのAMFを貫き通し、本体に突き刺さる。

致命傷だったのかガジェットは煙を出し駆動を沈黙させた。

ティオール「ふいっ…なのはさんの言うとおりだねっ」

なのは「…いつの間にそんな魔法を…?」

ティオール「フェイトママにね、近距離でも使える射撃魔法を教えてもらったの!形はそのままフェイトママのフォトンランサーだけだね…」

なのは「それにしてもガジェットのAMFを一撃で打ち抜くなんて

…」

ティオール「あ、弾頭は只の空気だよ?改良して、魔法で圧縮された空気を押し出してるだけなの」

なのは「そっか…周りに纏っていた魔法はAMFに阻まれたけど圧縮空気だけは本体に突き刺さったのね」

ティオール「そ、だからソニックショットって言う名前なんだ!良い名前でしょ!」

なのは「うん。良い名前だね」

ティオール「えへへ」

エリオ「そんな暢気に話してる場合じゃないですよ!さっきの一撃でAIが変わったみたいです!」

気がつくとも3人が守る穴の周りを囲むようにガジェットが迫っていた。

ティオール「わわわ…グラビティバインドは…」

エリオ「AMFに阻まれて効かないと思うよ。ティオのソニックショットもそう何度も連続では撃てないし…」

キャロ「エリオくん…どうしよう…」

エリオ「キャロ、身体強化魔法を頼めるかな？僕が近くの敵を何とか弾くから、ティオは僕の死角に来たガジェットをお願い」

キャロ「分かったよ。『我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を』」

ケリユケイオン『Boost Up Acceleration』

エリオの身体に力が漲る。

キャロ「機動力を上げる支援魔法。エリオくん。頑張つてね」

エリオ「有難うキャロ！頑張るよ！」

キャロ「…そうだ。ティオにも一つ魔法をかけるよ。『我が乞うは、幾多を貫く力。若き杖魔女に、撃ち抜ける力を』」

ケリユケイオン『Boost Up Barrier Power』

インフィニティハート『マスター。射撃魔法の威力が上がったようです』

ティオール「本当っ！？キャロ！凄いね！」

キャロ「効果が切れたら言つてね。またかけ直すから」

エリオ・ティオール「うんっ！！」

ティオール「じゃあ私も頑張っちゃおう！インフィ！パワープロテクションタイプI！」

インフィニティハート『Power protection Installed type』

並んでいたティオールとキャロが球体型の防御壁に囲まれる。

キャロ「…これは？」

ティオール「強度強化型の設置プロテクションだよ！多分相手の攻撃は防ぎきれと思う！私は基本的な射撃しか使えないから、キャロと一緒に援護だよ！」

キャロ「うん。でも何か、ここにいると力が沸いてくるような…」

ティオール「地味に魔力回復の効果があつたりするよ。ほんの微量

だから、キャラの支援魔法が1回補えるか位だけど」

キャラ「十分だよ！二人で頑張ろう！エリオくん！頑張つて！」

エリオ「うん！行くよストラダー！」

ストラダー「all light my master」

沈黙していたガジェット達が、火蓋を切られたかのように砲撃を開始する。

たちまちティオールとキャラには、エリオの姿が見えなくなった。

ティオール「うわわっ…案外強いかも…」

キャラ「エリオくんはっ！？大丈夫なの！？」

エリオ「大丈夫だよ」

エリオの念話が届き、そして。

ストラダー「Sonic Move」

爆発的な加速が一縷の軌跡を編み出した。

エリオ（キャラの魔法で支援されているからか、いつもより早く動ける！）

ストラダー「油断は禁物ですマスター。一機ずつ潰していきましよう」

エリオ（うん！頼むよストラダー！）

エリオ「てええええいっ！！」

数多の弾幕を交わし、身近にいたガジェットに迫る。

AMFに多少阻まれながらも、その本体に槍を打ち込み、本体が地面に落ちる前にすぐに違うガジェットへと襲い掛かる。

その後も二機、三機と次々と倒していくが、如何せん数が多い。いまだエリオの前には数多くのガジェットが立ち塞がる。

効果が切れたのか、機動力も元に戻った。

キャラ「エリオくん！これを！」

先ほどかけてもらった機動力増加魔法に加え、二つの魔法がエリオにかかる。

ケリユケイオン「Enchant Field Invade&a

mp;Boost Up Strike power」

エリオ「これは…?」

キャラ「AMFの効果を乗り越える魔法と、打撃力を上げる魔法…
ってエリオくん危ない!」

エリオ「っ!?!」

いつの間にか後ろから迫っていたガジェットがコードを強く撓らせ
エリオに襲い掛かる。

エリオ「避けきれない…!!」

エリオはプロテクションを発動させようとするが、ガジェットは既
に攻撃態勢に入っていた。

インフイニティーハート『Sonic Shot』

ティオール「残念でしたっ!」

エリオに襲い掛かるうとしていたガジェットがティオールの射撃魔
法によって吹き飛ばされる。

エリオ「ティオ!ありがとう!」

ティオール「ちゃっちゃんとやっつけちゃってよ!早くお家帰って美
味しいご飯食べたい!」

エリオ「ははっ、分かったよ!行くよストラダ!」

ストラダ『待ってくださいマスター!何か巨大なものが来ます!』

エリオ「!?!」

味方であるはずのガジェットを何体か吹き飛ばし着地したのは、今
までのガジェットの3倍はあるつかという大きさのガジェットだっ
た。

エリオ「…なに…あれ…」

エリオの顔が驚愕に歪む。

ティオール「おっきいねー」

ティオールは素直に感心する。

キャラ「いやいや!そんな悠長なこと言ってられませんよ!」

キャラは驚きと驚愕ついでにティオールに突っ込んだ。

3人の前には大きな球体のガジェットが立ちはだかった。
その大きさ、ゆうに五メートルは越しているだろう。

そんな大きな機体と、身長が140にも満たない少年少女が3人立ち向かっている。

沈黙を破ったのはガジェットの方だった。

『

人間の耳には聞こえないような機械音を鳴らしながら、ティオールとキャラを守っていたプロテクションにコードを殴りつける。

メキメキメキツ…

ティオール「くうっ！！防ぎきれないっ！！」

二人を守っていたプロテクションに輝が入り始める、プロテクションが破れる前に動いたのはエリオだった。

エリオ「…っ！！ストラダー！！」

ストラダー『Sonic Move』

加速したエリオとストラダーがティオール達を襲っていたコードを弾き飛ばす。

エリオ「ティオとキャラには手を出させてたまるかつ！！」

エリオは立て続けにガジェットに攻撃を刻み込む。しかし、AMFが強力なのか有効な一打が生み出せない。

エリオ「はあっ…はあっ…」

ストラダー『master!!』

エリオ「っ！！」

疲労し動きを止めたエリオにガジェットのコードが襲い掛かる。エリオは遅いながら、コードを回避していく。

キャラ「だめ…っ！この距離じゃ支援魔法が届かない！！」

エリオは二人の被弾を防ぐためか、幾分か離れて戦っていた。

ティオール「こっちはこっちで忙しいし…っ！！」

ガジェットは一機だけではない。AIがそう判断したのか、巨大な

ガジェットだけがエリオに攻撃し、その他のガジェットがティオール達に襲い掛かり、上手く身動きが取れない。

エリオ「くっ…だめだっ…倒せない…！」

エリオは一旦撤退しようとするが、ガジェットがそれを許すわけがない。

エリオ「しまっ…っ!？」

気づかぬ間に後ろから忍び寄っていたコードにつかまってしまうエリオ。

機械の容赦ない締め付けがエリオを襲う。

エリオ「うわあああああああっ…！」

メキメキメキッ…!

本来体からは出るはずのない音が響く。

キャロ「エリオくんっ…!いやあっ…！」

ティオール「数が多すぎて助けにいけない…!エリオッ…!」
その時だった。

既に涙目になっていたキャロ達の横に紅色のウイングロードが伸びる。

キャロ・ティオール「…えっ？」

キャロ達が困惑した一瞬のうちに、既にウイングロードに乗って突撃していく、マントを纏った一人の戦士の姿が二人の目に映った。

リンク「人のっ、弟にっ、何してくれとんじゃあーっ…!」

ブラストキャリバー『Jet Pantzer…!』

現れた青年が、強力なAMFを物とせず、拳一発でガジェットを吹っ飛ばした。腕に気を失いかけたエリオを抱えた、リンクの姿が、そこにあった。

ティオール「りんにいっ…!」

キャラ「リンクさん…っ!？」

エリオ「…リンクさんが…？」

リンク「大丈夫か？皆…いたたたたたっ!!！」

ブラストキャリバー「無理しすぎですマスター！あんな加速をするなんて！」

リンク「いやあ…エリオが捕まってるの見たらついカツとなっちゃって…」

ブラストキャリバー「自分の身体をもっと大事にしてくださいよっ!!！」

リンク「すまない…今後気をつける」

ブラストキャリバー「もう効かないっていうのは分かってるんですけどね…スバルのときもそうでしたし…もう知りませんっ」

リンク「怒るなよブラスト…」

ブラストキャリバー「…そんな一面をスバルに見せてやればイチコロなのに…」

リンク「ん？何か言ったかブラスト？」

ブラストキャリバー「何も言ってますん!!！」

ティオール「りんにつ！病院抜け出して来ちゃったのっ!？ダメだよ寝てなきゃ！」

キャラ・エリオ「…そうですよリンクさん！」

リンク「…ったく…いつまで他人行儀なつもりだお二人さん？」

キャラとエリオの頭にぽんと手を置きグシャグシャと撫でる。

リンク「フェイトさんが言ってただろ？フォワード陣は家族のような物だつて。家族が傷ついてる…しかも弟、妹が頑張ってるのに兄が寝てるわけにいかないだろ？」

エリオ「そうですか…リンクさ…」

リンク「今度から俺のこと兄さんと呼べっ!!！」

キャラ「ええっ！いきなりなんですか！」

リンク「他人行儀だからいけないんだ！言っただろ！家族って！家族ならいつでも助けてやるよ！ほら！こんな風にな！」

キャラ達の後ろから襲い掛かってきていたガジェットをリンクが一撃で吹っ飛ばす。

リンク「…聞いてくれ」

エリオ・キャラ「…はい」

リンク「困ったならいつでも助けてやる、遠慮なんてすることはない。俺が怪我してようがなんだろうが、必ずお前たちを助けてやるよ。分かったな？」

リンクの笑顔には何となく喜びが沸いているような気がした。

キャラ・エリオ「…はいっ！兄さん！」

兄さんと呼んだ二人の顔も喜びに包まれる。

リンク「テリオも困ったら何でも言っただぞ？」

テリオール「りんにい…最近あれが来ないの…」

リンク「ぶはっ！？そういう悩みはなのはさんかフェイトママに聞きなさいっ！！」

テリオール「うっそだよんっ りんにい、これからもよろしくねっ」

テリオールは小悪魔みたいなウインクをした。

リンク「…っと、こうつかうかしてらんねえ…弟達よ、此処を頼めるか？」

リンクの目線の先には、先ほど吹き飛ばされた時にかなりのダメージを負ったのか、動きが鈍った巨大ガジェットがいた。

エリオ「任せてください、必ず倒します。兄さんは中へ？」

リンク「ああ、なんかいやな予感がしてな」

キャラ「あ…ちょっと待ってください兄さん。ケリユケイオン、ヒールを」

ケリユケイオン『OK・Physical Heal』

リンクが光に包まれる。

リンク「おお…痛みが引いた」

キャラ「一時的な治療魔法です。後これを」

ケリユケイオン『Boost Up Acceleration&

amp; Enchant Field Invade & amp; Boost Up Strike Power」

リンクに三つの補助魔法がかけられた。

キャロ「機動力向上とAMFを無効化、打撃力向上の魔法です」

リンク「おお…ありがとなキャロ」

キャロ「どういたしまして、兄さん」

リンク「さて…そろそろ行くか。ティオ、二人のこと頼んだぜ」

ティオール「りんにいが頼んだことなら何でもやってみせるよ!!

絶対勝つね!!」

リンク「その意気だ。頑張れ!三人とも!」

キャロ・エリオ・ティオール「うんっ!!」

先ほどまでより身体が軽くなったリンクは、大急ぎで内部へと侵入していくのであった。

ストラダ「…リンクは行ったようですね」

エリオ「そうだね、ちよつと無茶しちゃうことになるけど大丈夫?

ストラダ…」

ストラダ「マスターのためなら幾らでも早く動きます」

エリオ「…ありがと、ストラダ」

ストラダ「Purge」

バシユッ…

エリオの装甲とストラダの装甲の一部が吹き飛ばされる。

キャロ「…エリオくん…本気なんだね…!!ティオ!二人で道を切り開くよ!」

ティオール「りょーかいつ!!インフィ!行くよおっ!!」

インフィニティハート「Sonic shot phalanx Shift」

ティオールに十数機ほどのスフィアが発生し、速いとまでは
いかないが確実に一機ずつ殲滅していく。

ティオール「くうっ…っ！！」

ティオールは懸命に魔力を供給しながら打ち崩していく。

キャロ「ティオが頑張ってるんだ！私も負けられないよ！！」

フリード「きゅくるっ？」

空気の読めないフリードがキャロの帽子から飛び出した。

存在を忘れていたキャロは慌てふためきフリードに飛び掛る。

キャロ「うわっ…フリード！出てきちゃダメっ！！」

ティオール「キャロ！危ない！」

キャロ「え？」

いつの間にか防御壁から出てしまったらしい。ガジェットのコード
が間近に迫る。

フリード「きゅくるうっ！！」

ぼわっ！

フリードの吐き出した火球がコードを焼き飛ばす。

キャロ「うう…フリード…ありがと…フリードは戦いたくて出てき
たの？」

フリード「きゅくるっ！」

キャロ「そうなの…じゃあ、一緒に頑張ろう！」

フリード「きゅくるっ」

次第にティオールとキャロによってエリオには突破口が見えてきた。

エリオ『ストラダー…行くよ！』

ストラダー『OK, my master』

一瞬の内に数多くのガジェットがいる中、たった一本の突破口を見
つけ出した。

エリオ「今だっ！！」

ストラダー『Sonic Move！！』

ズドンッ！！

装甲が減少した分軽量になったエリオとストラダは、目に見えなさそうな速度で巨大ガジェットに突撃した。

巨大ガジェットも見抜けなかったようだ。

既にその身体には一本の槍が突き刺さっていた。

大きく身体を震わせ、駆動を停止する巨大ガジェット。

誰もが息を吐きかけた時、再び駆動が始まった。

エリオ「　　なっ！急所を貫いたのに！」

ストラダ「おそらく　　自爆かと！マスター！早く安全圏に

」

時既に遅し。巨大ガジェットは強力な光で身を包み、轟音を発しながら爆散した。

エリオ「　　っうあっ！……」

声にならない叫びを上げ、大きく吹っ飛ばされたエリオは　　暴

走するリニアレールの外側へと弾き飛ばされてしまう。下にあるの

は地面が見えない谷だ。

キャラ「　　エリオくん……」

キャラが反射的に無謀にもエリオの後を追って谷底へ飛び込んだ。

ティオール「ええっ！！ちよちよちよ……！あんた達飛べないでしよ
うがぁーっ！！」

ティオールも覚えたての飛行魔法でフラフラ飛びながら谷底へと飛び込む。

後ほど、飛べない二人を一生懸命持ち上げようとしているひよっこ空戦魔導士が武装ヘリで保護されたそうだ。

ちなみに敵の自滅とはいえ、リニアレール外側にいたガジェットは戦闘と味方の自爆により全滅。かくいうビギナーズラックというものだった。

なのは・フェイト「　　あんな無茶しちゃダメでしょ……」

まあ、ヘリの中でののは達の怒りの鉄槌を喰らったわけだが。

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!」2章

リンク復活です。早いよ!!

主人公補正で治りが早いです。多分。

後半は列車内へ入り込んだスターズ部隊のお話です。

後編が終わったらリンクとスバルの惚気話を挟みたいと思います。

あ、コメントに好きなカップリング書いてくだされば多分R 15

指定で短編書きます。クロノ×なのはだと主テンションUP。

ちゃっちゃと後編書きたいところですが。あいにく主は何かと忙しいので完全版のUPは12月大晦日前辺りになりそうです。

正月特別SS?書くかもね。

そういえばあと1週間でのなのはのゲーム発売だよ!!

以前のゲームのガチキャラのヴィータちゃんが強くなっていることを期待。

だがクールタイム殆ど無しで砲撃放てるリインフォース、お前はダメだ(え

うそです、どのキャラも愛を持って接してます。

リインフォースを使う主のリア友にはなのはのディバインバスターで返り討ちにしています。

以前のゲームは相手の動きを読んで魔法を当てるという感じでしたが、今回はコンボが組み合わさっているみたいですね。

より格闘ゲームらしくなって良いと思います。主に遠距離攻撃主体の格闘ゲームですが。

＼それ格闘ゲームじゃないじゃん!!!／

続きます。

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!!」特別章

リンク「…おい、原作の時間軸からかなりずれ込んでるぞ」

スバル「しーっ、それは言っちゃ駄目だつて!!」

ティアナ「主が今年も一人で寂しいからお前たちと遊ぶ…だつてさ」

リンク「誰か相手してやれよあのクソ主…」

スバル「リン…書いてくれる人にそれはないかと…」

ティアナ「良いんじゃない？主はスバルとリンクをいちゃこらせ
るSSを書きたいみたいよ？」

リンク「自分に彼女が居ないから脳内でお花畑作ろうとしてるのか
主は」

ティアナ「寂しい主なんだから、それくらい付き合つてあげたら？

（同情の目）」

リンク「しよーがねえなあ…」

スバル「リンといちゃこら…ふふふ…えへへ…」

リンク「…やけに今日のミッドチルダは騒がしいな」

スバル「リン、忘れてる？今日はクリスマススイブだよ？」

ティアナ「年頃の男子がクリスマススイブを忘れるとは…」

リンク「…クリスマススイブってなんだ？」

スバル・ティアナ「…え？」

事の発端はこうだった。

なのは「クリスマススイブっていうのはね、家族やお友達、こ…恋人とかと楽しく過ごす日なんだよ。で、明日がクリスマスっていつて、今日の夜、サンタさんが配ってくれたプレゼントを開けて喜んだり、メリークリスマス！ってお友達とかに言って回る日なの」

午前任務を終え、ミッドチルダから昼食をとる為に時空管理局に戻ったリンク達は、食堂で偶然会ったなのはに今日の事を聞いた。

なのは「まあ、私の地元、地球にあるアメリカっていう国は、お友達とかじゃなくて家族で過ごすって事になってるんだけどね…私が住んでた日本って国ではお友達と云々って話に捻じ曲がっちゃってるんだけど…」

リンク「…サンタって誰だ？」

スバル「夜、皆が寝てる間に家の中に入って、プレゼントを置いてってくれる人だよ」

リンク「それにしては、ミッドチルダでは子供がリボンの付いた箱を持って大喜びしていたが…」

なのは「うーん…言っちゃ悪いかも知れないけど、サンタさんはホントは居なくて、お母さんお父さんがプレゼントを子供に買ってあげるんだよ…」

リンク「なるほど…サンタはクリスマスという物語の架空人物にし

か過ぎないっていう事ですね」

ティアナ「リンクにしては理解が良いじゃない、まあ、家族や友達とどんちゃん騒ぎする日と思ってもらって相違ないわね」

リンク「へえ…知らなかったな。なのはさんやスバルは今夜パーティ的なことをするのか？」

なのは「私はフェイトちゃんの家と家族ぐるみのお友達だから皆でフェイトちゃんのお家でパーティだよ！…でも、地球のお友達も呼ぶからリンク達は呼べなかったの…ごめんね…」

リンク「いえいえ…クリスマスがどのようなものか今始めて知りましたし…、…スバル達は誰かと遊ぶ約束をしているのか？」

とたん、その場に重い空気が流れ始める。

スバル・ティアナ「…ないわよっ！！あるわけないじゃんっ！！」

突然の悲痛の叫びにリンクとなのはが恐れおののく。

なのは「にやはは…任務どころで恋愛とか友達付き合いどころじゃないもんね…、困ったなあ…今日はもう…なのに」

リンク「…？」

なのはが言った言葉の最後はよく聞き取れなかった。

機動六課に戻ったリンク達となのはは、はやて部隊長と会った。

リンク「はやて部隊長、午後の任務ですが…」

はやて「無い」

スバル「…え？」

ティアナ「はやて部隊長、今なんて仰いました？」

はやて「午後の任務は無いと言ったんや、恋人とでも楽しく過ごしてきや、それと明日も全日休みや、なんせ年に一度しかない特別や

日やで？（ニコニコ）」

なのは「…にやはは…」

なのはは、とことん相手の気が読めない人だな、とはやてに思った。

はやて「ほななのはちゃん、早く地球に戻ってパーティしょ！楽しみやーっ！！」

なのは「ええっ！？はやてちゃん！まだ書類整理とかが…！」

はやて「そんなもん後々！早く遊ぶんやーっ！！」

はやてがなのはを軽く引きずりながら部屋から出て行こうとする。

なのは「あっ…リンク、スバル、ティアナ…メリークリスマス？」
プシュー、ボタン。

指揮室にはリンク達3人が残された。

リンク・スバル・ティアナ「……（。）。」「」
クリスマスに予定なんか無い3人が、残された。

スバル「…どうしょっか」

指揮室にあるソファに3人は腰掛け、途方に暮れていた。

ティアナ「どうするもこうも、何も予定がないわ…、明日も全日休暇？ありえないわ…」

するとリンクが言い放った。

リンク「…遊びに行くか」

スバル・ティアナ「…え？」

スバルとティアナは何を言い出すんだコイツは、という目でリンクを見る。

リンク「クリスマスっていうのは遊ぶ日なんだろう？機動六課は家族同然の仲間だし…3人で遊びにいつても良いんじゃないか？」

スバル「…でもでもっ、リンはなんか予定は無いの？…こ、恋人とか…」

リンク「さっきまでクリスマスを知らなかった人間だぞ？恋人もなんもあるかよ」

ティアナ「そういえばなんでリンクはクリスマスを知らなかったの？子供の頃両親からプレゼントを貰ったり、執務官学校でパーティに呼ばれたり…しなかったの？」

リンク「んー、物心付いた頃には育ててくれた人は既に家に居なかったし、市街地から家が遠かったから自然になつてた木の実とかで小さい頃は食いつないでたし。学校に入ったら入ったで、ひたすら勉強ばかりして回りが目に入ってなかったし…異様な雰囲気の子で周りの人間も俺に声をかけづらかったんじゃないかな…」

スバル「…リンのお母さんって見たこと無いけど」

リンク「ははっ、俺も覚えてねえよ、3歳頃から家に誰も居なくて自然の中で暮らしてたんだから…」

ティアナ「じゃあリンクが19歳ってことなのは…」

リンク「年齢の後に推定、ってつけたほうがいいんじゃないか？ってたまに自分で思うわな」

スバル・ティアナ「…」

スバルとティアナはリンクのサバイバルな生い立ちに言葉を無くした。

リンク「まあ…この世の中のことについてまた新しいことを覚えた、ってことだな、で、どうする？遊びに行くか？」

スバル「うんっ！行く行く！」

ティアナ「…しょうがないわね…行きましようか…」

リンク「おっし、じゃあ決まり！30分後にエントランスな！先に行くぜ」

午後1時15分。3人はミッドチルダに向かって出発した。

リンク「へえ…さっきは急いでたからよく見なかったけど、結構綺麗に装飾してあるんだな」

リンクは市街地の装飾に素直に感動する。

スバル「ホント…綺麗だねリン」

リンク「…お前の方が綺麗だよ（ボソッ）」

スバル「…っ！！ななな…何言ってるのさリンッ！！／／／」

リンク「あれ…聞こえちゃったか…」

ティアナ「…私が居るの忘れないでね？」

リンク・スバル「あ……」

ティアナ「まったく…そこまであれ何なら、二人、付き合っちゃえば？」

スバル「ふええっ！ティア！何を言い出すの！！」

リンク「ティアナ、悪い冗談は……」

ブラストキャリバー「さっきあんな事を吐いた貴方が言うことではありませんね」

リンク「ブラスト…お前……」

マツハキャリバー「お二方はデートかなんかしらないんですか？」

スバル「ししし……しないよっ！！」

デバイスをにらみつける二人をみて、ティアナは嘆息する。

ティアナ「はあ…リンク！ちゃんとエスコートしてあげなさいよ！私は一人で見たいものがあるから！」

スバル「…ええっ！？ティア！どこ行くのよーっ！」

ティアナ「二人で楽しみなさい…年に一度のク・リ・ス・マ・ス、そっとうい残しながらティアナは二人の前から颯爽と消えてしまった。

リンク「まじかよ…どうすりゃいいんだ……」

スバル「うう…ティアのバカ…、…リン、い、行こう！」ガシッ

リンク「のわっ！？」

スバルが乱暴にリンクの手を取る。

スバル「あっ…／＼／」

リンク「…自分から取っというて戸惑うってどうなんだ…？まあいい、この人混みだ、離れ離れにならないように手を繋ごう…ちゃんとエスコートさせていただきますよ？スバル？（ニコッ）」

スバル「…っ／＼／、ははは…はいつ！！」

二人は手を繋いで、のんびりと市街地を歩き始めた。

ティアナ「はあ…結局一人なんだよね……」

その様子を物陰から見ていたティアナは大きなため息をついた。

「ん…そこにいるのはティアナか？」

ティアナ「えっ…？」

ティアナが声のするほうに目を向けると、暖かそうな格好をした武装ヘリ操縦士、ヴァイスが居た。

ティアナ「ヴァイス…？何で此処に？」

ヴァイス「いやあ…航空隊もクリスマスだから休みになっちまってさ…暇だから一人寂しくミッドチルダに出てきたって所さ…、そういや、スバル達はどうした？一人みたいだが…」

ティアナ「ホントは3人で遊びに来たんだけどね…リンクとスバルのラブラブ度合いに耐えられないから逃げてきちゃった」

ヴァイス「なるほど…一人なんだよな？良かったら俺と一緒に回らないか？」

ティアナ「なんであんなか…まあいいわ、行きましょ」

ティアナは不貞腐れながら、しかし隣に人が居るという安心感に身を任せながら、市街地を歩いていった。

リンク「…さっき飯食ったよな？で、寒い冬になぜアイスクリームを食べる」

リンクは身近なベンチに腰掛け、手に持っている3段重ねのアイスクリームを見つめる。

スバル「ティアとミッドに来た時に必ず食べるアイスなんだー！冬場でもやってるから良いお店だし…それにデザートは別腹ー！」

リンク「そういうものか…？あ、スバル、こっち向いて」

スバル「ん…？んぐっ」

リンクがスバルの口元についていたアイスを指で絡めとろうとすると、勢い余ってスバルの口に指が入ってしまう。

リンク「あ…すまん、取るうとしただけ…ってスバルッ！？」

ちゅるっ…れるれろ…

スバル「ん…リンクの指…おいしっ」

リンク「何をしてるんだおいっ！！ばかつ！！／／／」

スバルの口元から手を外すと、スバルが不貞腐れたように言った。

スバル「ん…残念…」

リンク「何がだっ！！まったく…」

リンクも手元のアイスを食べ始める。すると、

スバル「…リリリ…リンクのアイスもおいしそうっ！！食べちゃえーっ！！」

ぱくり。リンクが舐めていたアイスの反対側からスバルが齧り付く、当然二人は顔が極限まで近くなるわけで。

リンク「…っ！？げほっげほっ！スバル！何をするんだ！」

スバル「だってリンクのアイスおいしそうだったんだもん！代わりに私のアイスあげる！ほら！」

スバルはわざわざ自分が食べていた方を向けてからリンクに差し出す。当然そこに齧り付いたら間接キスになるわけで。

リンク「いやいやいや！いらん！！お前のアイスだ！自由に食べえ！」

スバル「あれ…私のアイス…食べないの…？」

スバルが上目遣いでこちらを見てくる。幼い顔ながらも薄く上気した頬は妖艶さを醸し出していた。

スバルの顔が近づいてくる。顔との距離は数センチもない。

スバル「今度は…口で私の口元のアイスを舐めとって…？」

リンク「スバル…？」

二人は見つめあい、そして口と口が

リンク「…って待て待て！！食べる！食べるから！」

リンクが折れた。焦るようにスバルのアイスに齧り付く。齧り付いた拍子に蒸せ、ゴホゴホと堰をしだす。

スバル「…リンクの意気地なし…」

スバルはスバルで、自分のやったことに恥ずかしさを抱き、顔を伏せる。

エリオ「何やってるんでしょか…」

キャロ「ティアナさんが居ないから…デデデ…デートかなあ…」

ティオール「りんにとすばるねえ…あんなことを…はわわ…、邪魔しちゃいけないよエリオ、キャロ、行こう？」

偶然にミッドチルダに遊びに来ていた3人組に見られた。この話題がなのはに伝わるまであと二日。

ブラストキャリバー「リンクとスバルは上手くやってますかねえ…」

マツハキャリバー「なんとも無駄な時間になりそうですけど…」

ティアナのポケットでそんな会話をするデバイス2機。

ティアナが密かに別れた時に盗み取っていたのだ。

ティアナ「何2人で話してんのよ…」

盗んだ本人がげんなりとした。

アイスクリームを食べ終えた二人は今だ火照った頬ながら、街角の小さなジュエリーショップにやってきた。

分かりにくいところにあるからだろうか。クリスマスイブなのに客は一人も折らず、綺麗な女性がカウンターで静かに本を読んでいた。「いらつしゃい、こんな店に来るカップルなんて珍しいね…好きに見ていつてね」

リンク「俺たちはカップルじゃ…いいや、言い訳すんのも疲れた」

スバル「…リンク、いろんなジュエリーがあるよ！綺麗だね！」

リンク「初めてこんな店に入ったから良く分かんが…ああ、綺麗だな」

リンクとスバルは時折話しながら、ジュエリーを見て回った。

スバル「…？リン、これ…」

リンク「？どうした？…これは…」

とあるショーケースに入っていたペアリングに二人の目が留まった。

「ああ…それは…製造工程で間違えたか…本来同じ宝石を入れるはずだったんだが…一方にはサファイア、一方にはルビーを入れ込んでしまつてね…。色違いのペアリングになつちやつて…ペアリングつて言えないね…ふふっ…」

スバル「確かにね…」

スバルはそのまま他のショーケースに目を移したが、リンクはずっとそのペアリングを見続けていた。

スバル「リン…？行こう？」

リンク「…あ、ああ、ちよつと先に店を出ていてくれないか？もうちよつと見たいんだ」

スバル「ジュエリーに興味を持ったの？珍しいなあ…」

そういいながらスバルは店の外へ出ていく。

リンク「なあ…このペアリング、幾らだ？」

「ああ、そのペアリングかい？不良品とまではいかないけど…どうせ売れないんだ、……で良いよ」

リンクが手持ちの財布を見ると、その金額より余裕のあるお金が入っていた。

リンク「じゃあ頂こうかな」

「ふむ…なぜこのペアリングを買うんだい？」

店員は素直にリンクに問う。

リンク「さつき居たスバルって奴の魔力光が蒼、俺の魔力光が紅なんだ、だから」

「なるほど…あの娘は、あんたの大事な人かい？」

リンク「いずれは、そうなるかもな」

「ふふっ…いい返事だ、安くしてやるよ、ほら、持ってきた」

リンク「…いいのか？」

「あの娘はきつと美しくなるよ、このペアリングと共に大事にして

やってくれ」

リンク「…ああ、言われなくても」

店員とリンクは優しい微笑を浮かべた。

ガチャッ

スバル「遅かったねえ…身体が冷えちゃったよ…」

リンク「ああ…すまない…ほら」

バサッ

リンクの着ていた上着が無造作にスバルに被せられる。

スバル「わぶっ…リン、平気なの？」

リンク「平気平気。なんならこうするぞ？」

リンクは背後からスバルに抱きついた。

スバル「リリリ…リンッ！？何を…」

リンク「さっき俺を惑わせた仕返しだ…」

そう言うリンクはニコニコと微笑んでいた。

スバル「…リン…暖かいね…」

リンク「ああ…スバルもな」

二人は嬉しそうな笑みを浮かべ、進んでいった。

リンク「…ここは？」

スバル「ティアとミッドに遊びに来ると最後にいつも此処に寄るの！どう！？綺麗でしょ？」

緩い坂道を登った先、誰もこなさそうな高台で夕焼けを見つめる二人が居た。

リンク「…綺麗だ」

夕焼けに照らされながらもイルミネーションが光り輝く市街地、葉に光を反射させて輝く木々。そんな光景がスバルとリンクの前に広

がった。

スバル「…うん」

リンクが横を向くと、風に髪を靡かせながら夕焼けを見つめる、綺麗なスバルの横顔が見えた。

リンク「…スバル。これ」

スバル「…？…これは？」

リンク「さっきのジュエリーショップで買ったんだ。店員さんが言ってた入れる宝石を間違えたペアリング、サファイアの方、貰ってくれないかな？」

スバル「…いいの？」

リンク「ああ。スバルにあげる為に買ってきたんだから…」
ぎゅっ。

スバルがリンクを抱きしめる。

リンク「…スバル？」

スバル「…ありがと。大事にするね。…リンク。付けて？」

リンクに左手が差し出される。

夕焼けに染まる高台で、リンクはスバルの左手薬指にリングを嵌め、自身のルビーの入ったリングをスバルに嵌めてもらった。

スバル「リン…アイスクリームの時の続き…しょ？」

リンク「スバル…」

スバルとリンクは、そこで始めての口付けを、交わした。

先ほどよりも夜の藍色が広がってきていた。

スバル「もう…夜になっちゃうね…」

リンク「ああ…」

スバル「…寒くなってきたし、帰ろうか…」

スバルが少し寂しそうにリンクに伝える。

リンク「帰りに何か買って、管理局の休憩室で二人で食べるか？」

スバル「うんっ！！」

二人は寒い中、暖かい手を繋ぎ、帰路に付いた。

スバル「かんぱ〜っい!!」

二人でコップを重ね、始めの一口を口に含む、その瞬間、リンクが口に含んだ液体の味に思わず顔を顰めた。

リンク「スバル…ッ!!これっ…酒じゃないか!!」

スバル「いいじゃんいいじゃん!本日は無礼講ーっ!!」

リンク「こらっ…やめっ…」

二人きりのクリスマスナイト、酷いものだったと言っておこう。

スバル「ん〜…もう食べられにやい…」

リンク「お〜い…スバルさん…?」

休憩室でスバルが酔っ払って寝込んでしまった。

リンク「ったく…しょうがねえなあ…」

リンクは一人で片付けをし、スバルをお姫様抱っこする。

リンク「さて…スバルの部屋は…」

スバル「…あはあ〜っ、夢にまで見たお姫様抱っこ〜」
かぷり…

スバルが寝ぼけてリンクの耳たぶに喰らい付いた。

リンク「ちよっ…スバル…くすぐった…!?!」

ちゅるっ…ちゅぱ…れろ…

リンクの耳たぶがスバルの舌先によつて蹂躪されていく。

リンクはくすぐったさと気を保つので精一杯だった。

やっこのことでスバルの部屋に着いたリンクは中に入り、スバルをベッドに寝かす。

リンク「…ったく、やれやれ…俺も自分の部屋に…」

スバル「…やだ〜っ、りんもいっしょにねるの…えいっ」
ぐいっ。ばさっ。

リンクがスバルに多いかぶさるように引つ張られる。

リンク「ちょちょちょ…っ！スバルさんっ！？」

スバル「んふふっ…っ…りんのだきまくらっ…ぎゅっ」

真正面から抱き合っているためかなり胸の感触がリンクに当たるわけ。

リンク「スバルッ…胸が…当たって…！」

スバル「あててるんだもっっん！」

ぎゅっ…っ。さらに抱きしめられ、リンクの頭が混乱する。

リンク「スバル…これ以上はやばっ…」

スバル「…リンク…私の初めて…貰って…？」

先ほどの酔っ払っていた顔ではなく、真剣に、そして林檎の様に頬を蒸気させた顔を近づけられた。ひとたまりもない。

リンク「スバル」

リンクの理性が落ちかける。

ティアナ「はあ…今日は散々な日だっ…」

リンクは振り向く。

部屋のドアを開けこちらを向いて固まってるティアナが見えた。

えーっと、状況確認。

艶美な目でこちらを見つめるスバル。

そのスバルに覆いかぶさる俺。

結論。

あれ、これやばくね？

ティアナ「あんたたちっ…なにしてるの…？」

リンク「ご、誤解だーっ…！」

スバル「ええっっ、リンク、ヤル気満々だったじゃーん」

リンク「嘔吐くなっ…！」

ティアナ「あんたたち…ってか酒臭っ！！スバル…あんた飲んだわねっ！！」

リンク「そうだ！スバルは酒を飲んでて寝ぼけて…」

ティアナ「女の子に酒飲ませて酔っ払ったところ襲うなんてありえない！！最低！！」

リンク「違うんだああああっ！！！！！！」

次の日のクリスマスは一日中ティアナの説教だったことと、エリオたちの目撃証言でさらにティアナがさらに怒った事は言うまでもなかった。

ヴァイス「あれ？俺とティアナの話は？」

あ、そこはめんどくさいんで割愛。

ヴァイス「（。。。）」

終幕。

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!!」特別章

いいなーリンクとスバルいいなー（棒読み）

てことで特別編「二人の思い出クリスマス」でした。

前回正月SS書かなきゃーなんていってたけどクリスマスがありましたね。

そんなりア充イベント忘れてましたよっ！！（泣）

そういえば皆さんなのはゲーム買いましたかっ！？

主は喜びすぎて10時間ほどストーリークリアしてキャラ全部開放して飽きたところです（え

あとはアーケードで全キャラのキャラビュアーを空けるとスキルを集めるの位しか…。

クリスマスなんて糞喰らえっ！！ふんだっ！！

…とまあ童貞男子がブツクサ垂れてますが。

何はともあれ、メリークリスマス！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9420x/>

なのはStS再構成SS『COMBINATION ATTACK!!』

2011年12月25日13時49分発行